死にたがりの声

流郷進一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死にたがりの声

【Ｎコード】

Ｎ３２８０Ｚ

【作者名】

流郷進一

【あらすじ】

色々な人間模様が綴られていく予定です。

死にたがりの声

「氷山筑紫（ひやまつくし）くん、十八歳。学年が上がった時から大学受験のため律儀に勉学に励むも、最中にその言い知れない感情に駆られて自分の人生に疑問を抱き、ドロップアウトする。現在はそこそこ収入に恵まれた両親の庇護のもとで将来に何の希望も持てず、ただダラダラと寿命を消費する毎日を送っている、と」

女性は片手に持った手帳に目を通しながら、一息にそう言い切ると。

「話を受けた私個人としての総括は大体こんな感じなんだが、聞いていてどこか訂正したかった箇所はあるかい？」

手帳から顔を上げ、薄いレンズ越しに覗く涼しげな眼を、真っ直ぐ僕の方へと向けてきた。

彼女の言ったそこそこ裕福な家庭を象徴するかのような広めのリビングの、テーブルを挟んで向かい合う柔らかなソファに座りながらのやり取りだ。

「いや、その通りです。特に無いです」

「そう、良かった。だったらやはり気にしなければならないのは、言い知れぬ感情、とやらのことだろうね。そこをもう少し掘り下げていこうか」

そう言うと再び手元の手帳に視線を落とし、手先の滑らかな動きで何かを書き記していく。

僕は――。

その間、どこか怪訝な表情をしていた、のだと思う。

「ん？」

メモを終えた彼女が少しばかりその眼を丸くして、作り物のような透き通った声で僕に尋ねた。

「ははっ。まぁ、訝しむのも無理のないことだと思うよ。ネットの簡易投稿サービスでひたすら壁を殴るような言葉を吐いていたら見

知らぬ人物に突然コンタクトを取られて、悩みがあるなら聞こうじゃないか、ときたもんだからね。警戒するのは当然だ、と言っても……」

家に上げてからというのは、些か鈍感な反応だと思うけどね、と妙に格式ばった装飾物の整頓された部屋を見渡しながら笑った。

綺麗だが、彫刻のような冷たさのある顔。長く伸ばした艶のある黒髪。とても落ち着いた雰囲気があるけど、年齢はよく分からない。それでも多分、成人はしているのだと思う。

初対面の印象は――その、僕には分不相応の過ぎる容貌にも圧倒されたが、それ以上に、理知的で、どちらかと言えば冷徹な、機械のような人だと思って、少し怖かった。

雪のように白い、体温を感じさせない色の肌と言い、あまりにも、人間離れしていたからだ。

しかし蓋を開けてみればそれはどうやら印象に過ぎなかったらしく、その振る舞いは決してふざけているわけではないが、余裕に溢れていて、よく笑顔を見せる。

待ち合わせ場所に――外に出ることを想像しただけで赤面し、鏡の前で服装に四苦八苦する内に発汗してしまうような僕が、とても話しやすいと思える人だった。

それでも。

彼女が述べた通り、その邂逅は余りにも唐突で、言ってしまえば異常なものだ。

思い切って信じたい、胸中を打ち明けたいのにそう出来ない――昔から僕の邪魔をしてきたこの臆病な警戒心が、そのような場面において働かないわけがない。

それじゃあもうちょっとだけお話をしようか、と彼女は作り物のような声で、どこか優しさを含ませながら言った。

「キミの疑問が解けるまで、どんな質問でもしていいよ。まぁ先に断っておくと、プライベート方面の面白い話は全くないけどね。これといった付き合いのない、仕事場で寂しい一人暮らしさ」

言いながら、自分で笑う。その外見と比べて、笑い声はとても自然なものように、僕には聞こえる。
僕は。
「仕事って、一体どんな……？」
そう訊いた。
「メールでやり取りした時にも伝えたと思うけど、じゃあもう一度言おうか」
愚昧極まりない質問に、これといって嫌がる素振りも見せずに、彼女はソファの上で一度背筋を伸ばした。
「取りあえず掲げている看板には、天宮人生相談所、と外連味に欠ける記号が乗っているよ。実態もまぁ、大袈裟なものじゃない。困っている人の所に出向いて、場合に拠ってはご足労頂いて、話を聞いて出来る助言があればする。料金も大した額じゃない。今時なら中学生のお小遣いでも済む程度だ。それで少しでも救われる人がいるなら、と思ってるけど、実際どれだけ貢献できてるかは分からない」
最後の方は苦笑が混じっていた。僕は不必要に慌てて、何も知らないくせにそんなこと無いですよなどと言ってしまう。
でも本当に、彼女が本当に待っていてくれた時、その事実だけで僕は僅かながら助けられた気にもなったのだ。
声もかすれ気味で、フォローにもならない小人の醜態を、それでも彼女は有難うと言葉にして感謝した。
「でも、それはキミの警戒網をほどくだけの情報にはなり得ないね。嘘を言っているかもしれない。疑いの証拠を提示するのは簡単だが、その逆は往々にして難しい。さて、どうしたものか……」
「いや、もういいですよ」
ん？　と彼女が疑問を如実に浮かべた顔をする。
そして、僕は自分から切り出したくせに赤面した。これ以上の説明はいらないと思ったのは本心だったけど、果たして今のタイミングで、今の言葉選びで正しかったのか、もっと良い伝え方があった

んじゃないか、そうやって過去を何度も反芻して探っていく度に落ち込んでいく。
僕の、いつもの癖だった。
「信用してくれるのかい？」
彼女のフォローは簡潔で、自身にあふれていて、分かり易い。
「ええ、と言うより仮に貴女が碌でもない人物だったとして、もうどうでも良いというか……」
たとえば彼女が巷に無数に溢れている危険で奇怪な集団の勧誘員だったとして。
まともな武器を持つことも出来ず、常にひたすら身を屈めて自衛を図っていたような僕にももう一つの、投げ遣りな諦観を持つ一面があった。
ここで勧誘を断り続けても、家の住所が団体に漏れたりすれば、こんな子供を抱えた憐れな両親にだって必ず迷惑が掛かる。祖父母やその他の血縁者にまで影響が広がるかもしれない。
到底自分一人ではケアし切れない被害が出るかも知れない、けど。
それがどうしたと言うのだろう。
それを防いだからと言って、僕のこれからに何か変化があるのだろうか。
それを防がなかったからと言って、僕に何か不都合があるのだろうか。
生活が不自由になろうと、どこの誰から恨まれようと、そんなもの――。
――全部、承知の上じゃないか。
「それは話の運びとしてはとても都合が良いけど、キミの人生にとっては結構な障害になる価値観だね」
雰囲気が一変する。氷のような表情にユーモアを含ませていた口調が、神妙なものになる。
「どうしてそう思うんですか？」
僕は言う。

「だって、そうじゃないですか。誰かに迷惑が掛かるから駄目だとか、一人前の人間としてどうあるべきだとか、それを守らなかったからってどうなるんですか？　守ったらどうだっていうんですか？　そんなことに固執する人間に好かれるか、嫌われるかっていうだけの問題でしょう？　僕はそんな人にどう思われようと、どうでもいいんです。そう考えたら、今まで真面目にやっていたことが全部馬鹿馬鹿しくなったんです。そう考えたら……」

息が荒れて、顔面が茹蛸みたいに紅潮したみっともない顔で。

「人生自体が意味の無いような、下らないことしか無いようなものに思えて、とても悲しいんです」

言い続けている間、僕はずっと彼女から目を反らしていた。誰かの目を見て話すことなんて出来ない――彼女の瞳は、射竦められそうで、尚更だった。

本当に、恰好悪いことこの上ない。

でも僕のこの考えは間違ってない。確信がある。

倫理、道徳、常識なんてものは――人間としての尊厳を保つための模範と言うよりも、それを逸脱した者を叩くため、他人を傷付けるという背徳の快感を肯定的に得るための免罪符としての働きしかない。

その統率機能自体のミスには誰も関心がない。仮に気付いても見なかったことにする、何故なら――。

人はそれほど器用ではないし、清潔でもないからだ。

人という存在で居るためには、人は欠陥だらけだ。

下らない。

本当に下らない。

大学に入って、社会人になって、その先に一体何があるというのだろう？

「人生というものそれ自体に、意味は無いよ」

彼女が最初の時のような口調に戻って言う。

僕は、その言葉の意味を汲み取ることが、直ぐには出来なかった。

「え……？」
「生きてれば良いことがあるだとか、人生は本来素晴らしいものだとか、そういう戯言はあちこちで囁かれているけどね。そんなものに耳を貸す必要なんて無いのさ。ああいうのは能天気が能天気宛に発信する自己満足だからね。人生をただ一つの事象として見た時に、その属性をつけるのは自分しかいないんだよ」
僕は顔を上げる。彼女の顔を見る。
氷のような表情が――春の様に、と言うのは言い過ぎだけど、柔和になって、どこか自嘲するように笑みを浮かべていた。
「つまり、意味の無いものに自分で意味を『持たせる』のが人生だ。良いものにするのも悪いものにするのも自分次第。だけど、その意味を誰かに強制するような態度は頂けないよね」
さて、と手元の手帳が音を立てて閉じる。
「じっくり探りを入れていこうと思っていたんだけど、殊の外早急に話が進んだね。いや助かるよ。それでは」
彼女の言葉は、声質は冷たいが配慮に満ちていて、話し方がいかにも人間的に語りかけるようで、とても聞き取りやすい。
けれど、その時。
僕は決して逃れらない魔力を――彼女の口から紡ぎ出される言霊の羅列に感じていた。
「カウンセリングを、始めようか」

死にたがりの声―2

「まず、会話していて気付いたことが二つほどある」
じっ、と覗き込むような視線ではなく、ソファに身体を預けて部屋の装飾を眺めながら、横目で流すように僕の方へ気を向けている。
僕としても、その方が都合が良かった。執拗に見られたりするのは苦手だし、あまり丁寧な態度を取られると遣えるわけのない気を遣わなければならないと思って、余計な失敗を重ねてしまう。
そして自己嫌悪に陥る。
一度も会ったことが無いのに、長年の付き合いがある人ですら取ってくれない対応を、彼女は自然に行ってしまった。
対する僕は、柄にもない演説を繰り広げた反動で冷や汗をかきつつ、顔を俯けてテーブルの上に乗ったコップを見るようにしていた。
「一つはね。私は、特にキミの価値観を『否定』したわけではないんだよ。ただ不都合な考え方だと言っただけで、むしろそっちの方が真理に近いとは思っている。けれどキミは過剰に反応し、結構な弁舌を振るって自分の正しさを主張したね。挙句に自分でそんな自分を悲しいと言った。それはつまり、私の言ったことを、内心では自覚しているとみても良いのかな？」
「それは……」
そうだ。彼女の言う通りだ。さっき彼女が言っていたことはまさしくそれだけで、それが僕の中の何かに『勝手に』触れて、慣れない口を必死に動かした。
だから僕はすいません、と謝った。単純な会話のやり取りすら満足に行えない。
「多分、そうです。僕は間違ってないけど、この考え方しかできない自分が嫌になっています。もっと単純に生きられたら、と何度も考えました」
うん、と一度頷いてから、それでは二つ目だと切り出す。

「キミにはどうも二つの面……おそらく、人付き合いを苦手とする自分を駄目な存在だと思い込み、必要以上に責める自虐的な面と、自分を取り巻く全てを根源的には意味の無いものだと認識し、それに纏わる責任を破棄して当然だと考える、開き直った面がある。違うかな？」

「違いません。ついでに言うなら、自分がどんなきっかけで変わるのかも分からないんです」

「それは多分、キミが思っているより単純なことだよ」

僕は、はっとして顔を上げた。彼女はやはり最初は視線を適当に泳がせていたが。

やがてゆっくりと首を動かして、焦点を僕に合わせた。

僕は、彼女の瞳と正面から向かい合った。

「キミの片一方の面が象徴する、自虐という行為にはストレスが付き物だ。勿論好きでやってるわけじゃないのだからね。当然、いずれ限界を迎える。だけど周囲の人間にはそれが分からない。嫌なら止めればいいと思われてしまうだけで、そこまで想像力が回らないんだ。それがまた余計にストレスを溜める。その内に心は破裂しそうになり、自衛のために自らを破滅的な思考に委ねてしまう」

「……！」

「こんな感じかな。どうだろう？」

言われてみれば、確かに単純なことだ。思い当たることもある。納得するまで深く考える必要もなかった。

先程の場合は、『一度聞いたはずの内容を繰り返させてしまった』ということが負荷となったのだと思う。

ならばどうして、僕は今までそんなことに気付かなかったのだろう――と、気付けば再び自虐を始めている僕を、彼女がしなやかな腕を伸ばして制した。

「カウンセリングなんて言ったが、専門の精神科医では無いからあまり強く断言はできない。けど多分、キミはその掬っても掬っても終わらない泥沼のような思考を繰り返す内に心の病気を患ってしま

ったのだと思う。承知しているだろうけど、具体化できないからと言って馬鹿にしてはいけないよ。病気は脳の異常だし、異常は脳の活動を衰えさせて判断力を鈍くする。以前まで出来ていたことが出来なくなったとしても、それを嘆くのは極力防いで、そして可能な限り速やかに、病院に行くことだね」

――理屈では、分かる。

そもそも反省もなく次に活かそうと意欲も無い、まるで傍から見たら被虐欲を発露しているだけのような自虐など、行う意味など全くないのだ。

そんなことは言われなくても再三分かっていることなのだが――。

「それが出来ないから、病気なんだ」

僕の心を読んだかのような発言だった。

「だけど私の経験による見立てでは、キミはまだ軽傷の部類に入るよ。会話も充分なレベルで熟せているし、元々頭は良いのだろう。その気になれば回復は早いのだと思うけど……」

「すいません」

彼女が、ん、と何かを続けようとしていた口を結んだ。一丁前に意思疎通が果たせているような気になり、僕は素直に続けることができた。

「経験、と仰られていますけど、これまでにも僕みたいな人と会ったことが……」

言葉を受けた彼女は、真面目な顔付きになって。

「あるよ。それなりにね。みんな救ってきたさ」

そう答えた。

――とても、今更な疑問なのだけれど。

というより、既に一度生半可な気持ちで切り捨ててしまった疑念なのだけれど。

この人は一体、何者なんだろう？

僕は全ての患者を救ってきたと言い切った、得体の知れない存在を目の前にしているという恐怖にようやく自覚的になって、その想

いは僅かな攻撃性を伴って言葉となった。
「みんな……って、だって、そんなことが出来るんですか？　たかが一人の人間に」
幾らなんでも、それは大言壮語というものではないだろうか。
心に不安を抱えて満足に日常生活を送れなくなってしまった人は、表層的な症状こそ似ているかもしれないが、それこそ環境も、事情も千差万別のはずだ。
普通に考えればケアの方法だってその数だけ必要になってくるだろう。その全てを把握し、実行するだけの力が、この華奢な一人の女性にあるとでも言うのだろうか。
彼女は彫刻のような顔を崩して、口元に笑みを浮かべた。
「適当な質問を考えてくれていいよ」
「へ？」
「問題みたいな形式がいい。それを、私に尋ねてみてくれ」
「そ、それじゃあ清教徒革命は一体何年に行われたか、とか」
「あら、そんなに簡単な内容でいいのかい？　１６４１年に始まって１６４９年に幕を閉じたね」
意図が分からないまま、取りあえず脳裏に浮かんだものを律儀に口に出していく。
「日本国憲法第二十三条の内容は？」
「学問の自由は、これを保証する。だ」
言って、ふむ、と彼女は自分の顎に手を当てながら。
「そうだな。確かにキミのような状況の人間なら、言われたところで大学受験程度の知識しか思い浮かばないだろう。だったらこう、サブカルチャーなものでもいい。たとえば何々というアニメの第何話のあらすじがどうだった、とかね」
「ええ……」
そんなもの――こっちが覚えてない。と言うより、知らない。検証のしようがない。
仕方がないので、幼少の頃の記憶を辿る。頭に靄がかかったよう

になってすんなりとはいかなかったが、当時欠かさず見ていたとあるアニメの1シーンを思い出した。
「じゃあ、爆撃魔人ダンダークの第三十九話のあらすじを言えますか？」
そう言うと、彼女は顎を抑えながら少しばかり考えて。
「四幹部の一人ヨハネを苦戦の末撃退したかのように思われたジェニス達だったが、ヨハネが死に際に放った光によってルーン王女が敵の基地に連れ去られてしまう。一方基地では、刻一刻と迫るダンダーク復活の時を前に四幹部の一人セレナードが怪しげな行動を取り……？　果たして、セレナードの目的とは何なのか。そして、ジェニス達はルーン王女を敵の基地から取り返すことが出来るのか！？」
少しばかりの感情を込めながら、一息に言い切って、こんな感じかな、とまた笑った。
「多分、一言一句間違えてないよ。確認してみるかい」
「い、いや……」
呆気に取られた。詳しい文章がどうだったかなどは記憶の彼方だが、覚えているシーンがある。
セレナードは王女を脱出させようとして彼女の身代わりとなり、大勢の仲間に背後から何本も何本も槍を刺されて殺されるのだ。
あの残酷な描写は、子供ながらの純真に強く響いた。
だから多分、そのあらすじは合っている。
「私は、神様になりたかったんだね」
「は？」
また唐突な、それでいて余りにも非常識な、そんな発言だったので思わず耳を疑った。
「もちろん、私は人だ。ちっぽけな人間だ。だから空は飛べないし、手から炎を出したりとか、そういう奇跡は起こせない。けれど……」
ちょっと失礼するよ、と来客用のコップに口をつけた。
「この世で起こっていること、記録されていることを知って、覚え

ることは出来る。せめて人に残された可能性を……全ての知識を身につけて、それで誰かを助けることができたらなと考えたんだよ」
口調は、さっきまでのと何ら変わりのない、冷たい声質に余裕のある態度。
しかしその口から紡がれる内容は、あまりにも突飛な、現実感の薄い――異次元の言葉のようだった。
「だから努力した。今ので、実力の程は分かってもらえたかな？ 他にも聞きたいことがあるなら……」
「い、いや。もう大丈夫です」
「そう。私は出来る限りの知識を尽くして物事にあたってきたんだ。まだまだ覚えきれてないことは数え切れないくらいあるけど、今までの彼ら彼女らは、当時の私の力で何とか助けてあげることができた、と思う」
連絡を取るようにしてるけど、分からないことはあるからね、と弱弱しい笑みを作る。
「キミは、そんな人間は存在し得ないと思うかい？ 自分には決して到達できない道だと。それでもいいよ。そういう人の無念を晴らしてあげるために、私がそれを引き受け、それなりの年月を重ねて、この道を選んだのだからね」
さて、と、突然の告白に未だ地に足が着いていない僕を引っ張るかのように話題を変えた。
「まぁ、そんな身の上話はどうだっていいんだよ。何となく凄い、と思ってくれたならそれで良いんだ。私の仕事は、実はと言えばそれだけなんだ。私がキミの気持ちを理解していることを分かってもらって、少しばかりの尊敬なりをしてもらえたなら、それでね」
だってそうだろ、と僕が口を挟む間もなく続ける。
「単純な精神医学の問題だったら、その道のプロがいくらでもいるさ。覚えることだけが取り柄の素人がでしゃばる必要なんて無い。問題は、キミのような人間が抱えている問題が、懇切丁寧なカウンセリングや適切な薬だけでは解消しきれないというところにある」

「それって……」
至極簡単な話さ、とガラス細工のように綺麗な容貌の女性は言った。
「キミは、健康な身体に戻ったとして、じゃあ他人を傷つけることに躊躇が無い下らない人間がひしめくこの社会に飛び込もうなんて、思うのかい？」

死にたがりの声―3

思わない――と、即答しそうになる。けれど、僕はそこで一度踏み止まった。

考えてみる。たとえば先に述べたような社会に対する、人間に対する不信を抱くことそれ自体が病気なのだとしたら。

そもそもが現行する仕組みに馴染めない存在を病気という枠に押し込むために、その言葉が定義されているのだとしたら。

僕の身体が『健全な状態』とやらに戻ってしまえば、今みたいな社会に害を為すような発想そのものが、消えてしまうのではないか。

鬱屈としていた過去のことなどすっぱり忘れ、もしくは夢のように実感の薄いものと化し、忌避していた筈の流れの中へと知らず知らずの内に引き込まれてしまうのではないか――。

だとしたら、はっきりと答えることなど出来ない。

自分が今の自分じゃなくなることなんて、想像することも出来ない――。

「そうやって自分の内面を意欲的に掘り下げようとする態度は、感心できるけどね」

気付けば思考が止まらなくなっていた僕は、彼女の声に引き戻される。

道端で転んだ子供を眺める時のような、慈愛と憐憫のない交ぜになったような表情をしていた。

「これは、そんなに難しく考えることじゃ無い。もし仮に、世間でいわゆる健康と呼ばれている状態が、社会の歪みに無頓着でひたすら経済を回す機械の様になるということを指すなら、私はわざわざ今みたいなことを尋ねたりはしないよ」

キミはどうやら、一度深みにはまると周りが見えなくなるみたいだね、と今まで一番優しい顔をする。

僕は複数の意味で、やっぱり、赤面した。

だから病気が治って、頭がすっきりして、且つ今みたいな思いが胸の中に残ってたら、の話さ。と、彼女は丁寧に補足した。
そういうことなら――。
「思いません……ね。多分」
「だろうね」
思わない。人の不幸を喜び、そしてそれを本能の所為だと諦めているのか開き直っているのか判然としない曖昧な態度で肯定し、自らの小さな誇りを守るためなら平気で他人を馬鹿にする、そんな群れの中で生きていこうとは思わない。
病が完治し、自虐癖が無くなり、辛い思いをする機会がほぼ全て失われたとしても。
――そうなんだ。
そういうことだったんだ。
僕はようやく気付いた。自分の常の、一見何処かに向けて進んでいるようでいて、その実がむしゃらに空を掻いているだけだった思索が、久しぶりに実を結んだ。
僕が幾ら万全の体調を保っていたとしても。
――この世には、それを置いておくだけの居場所がない。
そして、それは。
「悲しい、ですね。悲しいことなんです」
「その通りだ」
けどね、と彼女はそこで少しソファに沈めていた身を乗り出した。
「じゃあ動かない、というわけにもいかないんだ。キミがもし、死というものを恐れているのならね」
「死にたくないなら……」
「死ぬのは、誰だって怖いよ」
その一言は、確実に僕の無駄な部分の思考に費やすための労力を省いてくれたと思う。
こんな世界で生きていたくはない――けれど、死んでしまうのも厭だ。

僕は自分がどっちつかずで中途半端な立ち位置でいることをすぐに、素直に認めることが出来た。
「でもそれは、どちらも本心だろう？　決して共存は出来ないけど、それでも同等の価値を持っているキミの願望だ。そして……」
「あなたはそれを、どうやって解決するんですか？」
その時、僕は彼女と出会って以来初めて、それは極僅かなものだったけど、機械のように冷たい印象の顔から表現された驚きという感情を見た。
彼女のことだから、話の流れを推測されたことに対するものではないだろう。愚鈍な反応しか出来ない僕ですら予想可能だったことだからだ。
それとも、僕がそれをしたということの方に驚いたのだろうか。致し方ないこととは言え、僕はそこまで間抜けに映っていたのだろうか。
本心は分からない。とにかく――。
やっぱり彼女は、次に笑った。
「世界の方をね、新しく作るんだ」
さっき、神様になりたかったって言っただろう、と言う。
確かに言っていた。だからこんな突拍子のないセリフでも、今度は吸収するのに時間が要らなかった。
「キミは最近、夜になっても眠れなかったり、何の前触れもなく泣きたくなったりすることはないかい？」
「ありますよ。布団に入ってからも一時間くらいは寝れません」
「幻聴などもあるだろう」
「時計の針が進む音がやたらと大きく聞こえたり、遠くの駅を走っている筈の電車の通る音が延々と続いたり」
「昼間聴いていた音楽が頭の中で止めようとしても鳴り止まなかったり、視界に入る全てのものが無性に汚らしく見えたりね。私にもそういう経験はあった。だから」
分かるよ――と言った声が一層儚げに聞こえた。

「どうしようもなく辛かった。悩みに悩んで死にたくなることも多々あった。けれど、私は小賢しかったんだね。なら何をしたらいいのか、原因をどうすれば取り除けるのか、自分の望みは何なのか……苦悩を重ねる一方で、そんなことを考える余裕も持っていた」
「じゃあ、それで解決したんですか？」
いや、と首を小さく横に振る。
「足りないものを認識した。何を欲しているかも自覚した。でもそれは、どんな手を講じたところで絶対に得られないものだということも、小賢しい私は同時に理解したのさ」
「それが……」
僕は答えを知っていた。
「神様だったんですね」
「そう。まぁ、そこまで大仰な存在じゃなくても良かったんだけどね。ただちょっと、自分のことを分かってくれて、加えてこっちからも尊敬できるような、そんな人物が居てくれたらと思った。安心したかったんだよ」
「それで、自分が？」
「無ければ作れ、の発想だね。当時の私の傍にそういう人が居たら、きっと少しは楽だったろうから。同じような目に遭っている人には、なるべく手を差し伸べてあげたいと」
そう思ったからこその、今の立場さ、と結んだ。
聞いていて、何故だか胸が苦しくなった。
「はっきり言うとね、キミの瞳に映るこの世界の実態は、大体その見立て通りのものと思って良い。だけど、いくらそれを厭うて憎んで憤慨しても、自分の存在を切り離すことは出来ない。キミだって、寛大なご両親が養ってくれていなければ今みたいに話すことも不可能だったわけだ。両親という世界との接続があってこそ、キミは生存を許されている」
返す言葉もない。やるやらない以前に、僕には一人で生きていく力など備わっていない。それくらいは自覚している。

「だから生きていくためにはどうしても関わりを持たなくちゃいけない。そこで私は、キミに新しい世界――『帰る場所』を提供する」
「帰る場所？」
どういう意味だろう。
「私が悟ったのはね、結局、人は誰かとの繋がりが無ければ生きられないということなんだ。キミが絶望する要因を詳しく見ていけば、恐らく世間で暮らす人との価値観の相互不理解にぶつかるのではないかな。孤独というものは、場合に拠っては死と同じレベルで辛い」
ネットも上手く活用出来ていなかったようだしね、と悪戯っぽく言う。
何も言えない。
「先に言ったね。私はこれまで何人もキミのような問題を抱えた人と話してきた。その全員と今でも連絡を取るようにしている。ゆえに、彼らを紹介すればキミと気が合う人もそれなりに現れるのではないかと踏んでいる」
社会の腐った荒波に揉まれたら、そこで傷を癒せばいい、と余裕を含めて言った。
「私も居る。出来ることなら何でも相談に乗るよ。もし上手くいかなかったら、また別の方法を模索していこう。そしていずれキミにも余裕が出来たら、もう一度外に目を向けるといい。もしかしたら、そこでも良い出会いが待っているかもしれないからね」
最後にどうかな？　と言って、場には少しの間沈黙が流れた。
僕は決め兼ねている。この際、彼女の口から紡がれた説明を疑うことは止めにする。
聞いていて、僕にしてはあっさりと内容を理解して――なんだか宗教みたいだな、と思ったりした。
でも、それは大した問題ではなかった。宗教とは元々困っている人の心の拠り所になるためのものだし、世の中に蔓延している偏見は、現在の団体の多くが手段と目的を逆転させてしまい、それこそ強引な価値観の押し付けを図ってくるからだ。

その点で言えば、彼女の提案はとても真っ当なもので、疑う必要性などはどこにも無いのだけれど。
――問題は。
僕の臆病さと卑屈さ。漫然とした退屈よりも、住み慣れた環境が変化することの方を余程嫌がる、怖がりの怠惰性だった。
「まだちょっと、決心がつかないです」
気持ち目を伏せながら、そう返答した。
対する彼女は、それでもどこか納得した様子だった。
「うん。まだキミは若いから、少しの間ゆっくりと考えればいい。じゃあとりあえず、携帯番号だけは交換しておこうか」
細い指がポケットに伸びて、それらしき数字が羅列したメモを僕に渡した。
僕は慌てながら携帯を取り出して、ぎこちない操作で電話をかけた。
「では、この辺で失礼しようかな。ああ、最後にもう一度言っておくけど、病院にはなるべく早く行くようにね」
「あ、あの……！」
彼女が退室の意を告げ、ソファから立ち上がった時になって、僕は初めてその事実に気付いた。
いや、事実に気付いたというよりも、それを特に気に留めていなかった自分のおかしさを自覚した。
――僕は、彼女の名前をまだ知らないのだ。
でもそれ以前に、どうして彼女が名乗らなかったのかという疑問がある。
事務所の名前なら口にしていた――なら、天宮というのが彼女の苗字か？
どうしてそんな、微妙な真似をするのだろう。
「名前、教えてもらってもいいですか？」
「ん？」
そこで彼女は――なぜだか、彼女の方が疑問符を浮かべて、腑に

落ちないという顔をしている。
何かが噛み合っていない。
「外で会った時に、名刺を渡してなかったかな？」
「えっ」
僕は虚を突かれて一瞬硬直した後、手だけを動かしてポケットをまさぐった。
紙の感触がある。それを引っ張りだす。
そこには――。
「もちろん」
「天宮スミレ、さん」
「偽名さ」
「はぁ」
「諸事情が色々とね。悪いけど、ちょっとそこは答えられないんだ」
ごめんね、と言いながら玄関へ向かう。送るために僕もついていく。
「あの、料金は」
「ん？　あぁ、また今度でいいよ」
「そ、そんな感じで成り立つんですか？」
「ははっ。キミはまず自分のことを顧みなよ。私のことは、心配しなくても平気さ」
お茶をごちそうさま、病院には行きなよ、と最後にもう一回念を押して、天宮さんは扉の向こうに消えた。
――考えてみれば。
あの人はどうやって、僕の存在を探り当てたのだろうか。
それに適応する語句で検索をかけたのだろうか。『鬱』や『死にたい』などという言葉で浮き彫りになるのは、ほぼ平和の群像だけなのだけれど。僕は使わないし。
安易に連絡先の交換なんてしてしまったけど、果たして本当に大丈夫なのだろうか。聞いたこともない会社から見たこともない桁の額を請求されたりしないだろうか。

探れば探るほど、怪しいことだらけだ。
――まぁ、いいか。
天宮さんの言葉で、僕の中に巣食っていた閉塞感のかなりがほぐれたのも事実だ。
あの話の全てが詐術に基づくものだと言うのなら、それはもういっそ手際を褒めるべきだとまで思う。
帰る場所――新しい世界。
こんな僕を受け入れてくれる人が待ってくれているなんてことが、本当にあるのだろうか。
身体が幾分か、軽くなったような気がする。
そして僕はパソコンの電源を入れて、近在する病院の検索を始めた。

死にたがりの声―3（後書き）

直感で浮かんだタイトルだったのですが、そこまで死にたがってませんでした。
次の、「あまのじゃくの歌」に続きます。

あまのじゃくの歌

空は低くて窮屈だ。鳥はこの小さな箱庭の中で翼を満足に広げることも出来ず、その身をひたすら重力に晒しているだけなのだろう。

海は狭くて不透明だ。人が楽しそうに浸かっている様はまるで池に浮かぶ蛙のようで、上がってくればその身体に纏わりついた無数の濁りが外気に混ざって気味が悪い。

近付いてみれば雪は美しい純白などでなく、多量の塵や埃を内包した灰色の不純物である。

夢というのは基本的に虚しいものだ。もし叶えたとしたら、それが嬉しいと言うなら、叶えた時に喜んだり祝ったりしてくれる周囲の人間がいるからこその幸せなのであって、もし周りにそのような存在がなかったら、夢単体には何の希望も託されてはいなかったことが初めて判る。

孤独に見る夢ほど滑稽なものはない。睡魔が誘う刹那的な幻想の方がまだマシだ。

そして――。

「人生とは、とても楽しいものなのよ」

「何言ってんのよ」

壁際のベッドから覗く、窓越しの夕焼色に染まった空から顔を背け、僅かに目を細めながら儚げな口調で――悟ったような口を利いたあたしの頭を、奥園雪（おくぞのゆき）の持った、高校の校章が刻まれているファイルがその重みに任せて叩いた。

あたしはわざとらしく苦笑しつつ、悪戯っぽい口調で言う。

「ちょっと、病人には優しくしなさいよ」

「あのね……」

雪はあたしが乗っている寝台の傍に設置された机に今のファイルを置きながら、呆れたような視線を向けてきた。

「反論できない冗談には戦隊モノで支給される共通の光線銃くらいの価値もないの。分かる？　あんたの冗談は冗談に聞こえない」
「たとえは意味不明だけど、まぁ言いたいことくらいは」
「結局あいつら、大体の戦闘はそれぞれの固有武器使ってんのよ」
とある病院の個室。今は夕日に照らされて赤く染まっている部屋も、夜になって電気が点いたりそれが明けて外が明るくなったりすれば、床も壁も天井もこれでもかという程潔白な、清潔感を主張する。
薬品みたいなものが混じった無機的な臭いも合わさって、あたしは少し落ち着かなくなる。
でも一方で、それが逆に心地良いと感じたりもする。
病室の雰囲気がではなく、何となくむず痒くなるような自分自身を、まるで他人事のように楽しいと思ってしまう。
あたしは――捻くれているのだ。
「そんな感じで言いたいことも言えなくなったわたしが下手に気を遣って気まずい雰囲気になったらどうすんの。あんたそれでいいの？」
「雪って、面白いね。そういうこと、普通は一々言わないよ」
「そっちが変だから必然的にわたしもこうなるのよ」
あたしが笑うと、雪も静かに口を緩める。
そういう風にあまり大袈裟な仕草を取らなかったり、やたらと偉そうな口ばかり利いたりする態度に反して、雪の顔は齢の割に結構幼いとあたしは思う。
けれど、綺麗に切り揃えられた髪や、その上に飾り付けられた赤いカチューシャと一緒に見てみると、とても可愛らしく映えるのでそれはそれとして良いのだろう。
雪はよくあたしのことを綺麗だと褒めるけど、個人的には雪の方が他人に好かれる顔だろうと思っている。
まぁ、やっぱり外見と内面との差がそれなりにあるので、果たしてその先があるのかどうかは分からないけど。

――あたしはあたしなりに本気で、雪には幸せになって欲しいと思っていた。
「あたしはさぁ」
あたしがおどけた雰囲気を心掛けると、それを受けた雪はかえって真面目な表情を作る。
それなりに付き合いは長いのだ。あたしの表面的な態度が話の深刻さと反比例することを、彼女は承知しているらしい。
それでも、あたしはこの性質を改めるつもりは無いのだけれど。
「今の医学って、もう充分進歩してると思ってたんだ。０か１００か、言っても５０パーセントかくらいの判断は迷わずきっちり出来るくらいにさ。でも……」
雪が顔をしかめる。彼女はそれでも、同情しているわけでも嫌がっているわけでもない。
あたしは昔から彼女と居ると、とても話し易かった。
「２０パーセントって何だか、中途半端だよねぇ」
「……」
でも、あたしは雪に対して上手に気を回すことが出来ない。いつだって、自分が言いたいことを言いたい時に言いたいだけ言って困らせる側だった。
２０パーセントというのは――来週に行われる、あたしの手術の成功確率だ。
あたしは昔から心臓に病を抱えていた。それでも最近までは薬を飲みながら病院にも頻繁に行きながら誤魔化して、学校にも通って日常生活を送っていたのだけど、遂に来るべき時が来たということらしい。
けれど、発作がある時とない時では随分と体調に落差がある。未だに少し、実感が沸いていないという側面もある。
こういう境遇の時、世間では具体的な数字を患者に知らせない場合もあるらしいけど、捻くれた性質のあたしはどうしてもそれを聞きたくて、そんなあたしを理解している雪の重い口から半ば無理矢

理に聞き出した。
どうして雪が知っていたのかと言えば――多分、母がそのまま教えたのだと思う。
母はあたしが小さい頃に配偶者である父を亡くして、以来女手一つで病弱なあたしを育ててきた。
その疲弊していただろう母が――ひょっとしたらずっと前から知っていたのかもしれない――絶望的と言うに充分相応しい数字を聞けば、誰にも打ち明けずに一人で抱え込めるとは、あたしには思えない。
雪ならば信頼できると判断したのか、だとしたら結局それは裏切られてしまうわけだけど、きっと、そのような事情だろう。
勿論、あたしが聞いたことを後悔しているなどということはない。雪にもそう言ったし、彼女ならそれに余計な解釈を加えることもないだろう。
でも、だからと言って、いくら当事者だとしても、自分からこんな話題を振ってしまうのは些か良くないことかもしれないと、少し後ろめたい気持ちになる。
口を止めることは、出来ないのだけれど。
「死ぬの確定、ってなるよりは随分マシだけどさ」
「そう考えるのが、一番いいんじゃない」
入院したての頃は持ってきたファイルを一々指差して、授業に遅れないように目だけでも通しておきなさい、と本当の母のような口を利いていたけど、最近ではあまり言わなくなってしまった。
あたしはそれが少し寂しい。死は逃れられないと認識させられているようで――ではなく、彼女のあの口振りが嫌いではなかったからだ。
自分で切り出しておいて無責任だけど、これ以上広げても仕方のない話題なので、少しばかりお互いに口を閉じていた。
やがて、雪が唐突なことを言い出した。
「わたしに、何か出来ることある？」

「え？　いや、もう既に色々と世話焼いてもらってると思うけど」
「そうじゃなくてさ、何かこう……なんて言えばいいのかな」
あたしは、雪が言いたがっている内容を察した。
「死に行く前に最後の願いを、みたいな？」
「なんでこっちが一生懸命言葉を選んでるのにそういうこと言っちゃうのよ」
「本当に気を揉んでいたのならその反応はおかしい」
「どうせ気にしないくせに」
「傷付くなぁ」
あたしはもう一度笑って、雪の目を見る。
「その通りだけどね」
「それで、何かないの？」
尋ね方がぞんざいになった気がする。他にすることも無いので、あたしはようやく答えを考える気になった。
「うーん……」
しかし、思った以上に捗らない。内面に潜ってどれだけ探れど、我欲らしいものは見えてこない。
そもそもあたしは子供の頃から、多分病気とは関係なく、諦めの良い方だったというか――物事にそこまで執着するような人間ではなかった。
店を回っていて目に付いたものがあっても駄目と言われればすぐ手を引っ込めたし、休み時間に心の限り動き回る同級生を見ていても羨ましいとは思わなかった。
何と言えば良いのだろうか、結局、大抵のことは無ければ無いでどうにかなるものだと、子供ながらに達観した面があったのだと思う。
必要なものだったら手に入っているはずである、手元にあるもので出来る範囲で動けば良いのだと、半ば運命論のようなものに思考を委ねていたのだろう。
そんな調子でここまで来てしまったものだから――。

「自分で自分の欲のなさにびっくりしてる。聖人かもしれないあたし」
「駄目。何か言いなさい」
「そんなこと言われてもなぁ……」
どれだけ考えを巡らせても一向にそれらしい意見が浮かんでこない。総理大臣になりたいとか、そういう突拍子もない下らない子供の卒園アルバムみたいな発想しか出てこない。
捻くれたあたしの脳は、こういう真っ当な質問で来られると弱い。見るに見兼ねたのか、しばらくして遂に雪がもういいわよ――と口に出した時。
稲妻のように閃きが生まれた。ここまでくると呆れてしまう。
「歌」
「うた？」
「子供の頃にね、何かで聴いて、なぜか気になってた歌があるの。それをもう一度聴きたい」
「持ってないの？」
「ちっちゃい時の話だって。自分で調べる方法なんて知らないし。多分、それっきり」
「曲名は？」
「わからない」
「歌手は？」
「わからない」
「困ってしまうわ」
鳴く？　と聞くと、そんなわけないでしょと返ってきた。
「じゃあせめて、どんな感じの曲だったのか教えて」
「再現するの？　難しいと思うけど」
何せ、本当に遠い、油断すると霞んで消えてしまいそうな記憶だ。
あたしが宙吊りになったようにおぼろげな旋律をハミングで奏でると、雪はやっぱり苦いものを噛んだような顔をした。
「本当に、そんな感じなのね？」

「わからなーい」
けたけたと笑うあたしの顔を、ため息交じりに眺めたかと思うと、雪は静かに置いていた鞄を肩にかけた。
「帰るの？」
「大仕事になりそうだから」
「ごめんね。部活だってあるのに」
「別にいいわよ」
あんたとわたしの仲でしょ――と、最後に恰好つけたセリフを残して雪は病室を出ていった。
「……ふぅ」
一気に閑寂として、徐々に薄暗くなる病室を意味もなく眺めまわすと、あたしは横のファイルに手を伸ばす。
――本当は、そこまで気にしていたわけでもなかったんだけど。付け焼刃みたいな希望だったけど。
でも、手に入るかもと思ったら本当に聴きたくなってくるから不思議だ。あたしらしくない。
なら、騙したことにはならないだろう。砂漠のような環境で探し物をするはめになった雪だって怒りはしないだろう、と誰に対するわけでもない弁解をして。
あたしはファイルを開き、中のプリントを読み始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3280z/

死にたがりの声

2011年12月14日15時46分発行